

宮内庁書陵部蔵『類標』をめぐって

——近世後期における索引の登場とその思想——

梅田 径

一 はじめに

『明月記』建久九年（一一九八）二月廿五日条に次の記事が残る。

廿五日、天晴、

自殿仰云、竹爾雪降古歌、小々可注進、予蒙此仰之後、引見三代集并後拾遺・金葉集之処、竹雪歌無之、近代常詠歌也、定巨多歟由存之処、更不見、詞花集當時不持之間、又勘見柿本・紀氏集、遂以無之、仍崇徳院百首、堀川局（百首ノ誤カ）予并千戴集二首、（詠人共以書之持參、非可然人書之持參、）

定家は良経から「竹に降雪」題の古歌を探し出すように仰せを受け、まず「三代集」と『後拾遺集』と『金葉集』を検索したが、竹雪題の歌は見つからなかった。近頃はよく読む歌題なので、さぞ多くの例が見つかるだろうと思っていたものの、用例が検出できない。『詞花集』は所持していなかったため、さらに『人麿集』、『貫之集』を検索したが見つかからない。結局『崇徳院百首』（久安百首）、『堀川百首』、そして自分の歌と『千載集』二首をもって持参することにした。この後さらに『万葉集』以下も引見するべきかと定家は思案している。

この記事は引物絵に竹雪が描かれているのでそれにふさわしい古歌を求められたという状況であるが、ある歌題の「古歌」を検索する必要に駆られた時、どのような資料の範囲で調査してきたのかが伺える点で興味深い。まずは勅撰集で検索をかけ、その次に『人麿集』、『貫之集』という歌仙の私家集、それから時代が下る百首歌、近い時代の勅撰集と自分の詠というわけで

ある。

このように文学作品はただ通読して己の物とするだけではなく、その用例や組織を調査する必要に駆られることがあった。だが、中古中世の記録類からこうした「調査」の様子が伺える事は少ない。稿者が知る範囲では他に『看聞日記』永享十年（一四三八）二月七日、八日条において臣下への返歌に「君」という言葉を使ってよいのかを『八雲御抄』を通じて調査したという記事を知るのみである。これは用例の検索というよりも先例故実の調査であろう。ただ、現在も無数に残る歌枕書、古辞書、あるいは部類された歌集、漢籍であれば『芸文類聚』や『太平御覧』のような類書が必要とされたのは、これらがこうした調査の便にふさわしい体裁であり、便利だったからである。

江戸中後期にはこうした調査研究の用に、新しい形態の書物が登場する。広く「索引」と呼ばれるこのジャンルは、それまでの部類書とは異なる大きな特徴を備えていた。それは調査したい項目の位置を「丁数」によって示すという形態である。丁数によって知りたい情報の位置が確定されてさえいれば、索引を利用することで、本文に遡って情報を得ることができると。

索引がそれまでの類書と根本的に異なる点は、本文そのものを内包せず、本文に対応する情報だけを所持している事にある。これら索引群は「類語」「類字」「類標」などの書名が付され、多種に渡って現存している。しかしながら、こうした索引類が文学研究の対象として論じられることは稀な例外を除いてほとんどなかった。

しかしながら、これら索引の登場は極めて重要な書物史・読書史的視座を

Abstract

提供するものと考えられる⁽¹⁾。国文学研究資料館が提供する『日本古典籍総合目録データベース』⁽²⁾では「索引」の件名が設定されているが、それらはほぼ近世後期の制作にかかり、中世にさかのぼるものは見られない。索引類は近世後期になるまで登場しなかったのである。古代から文献を検索することの需要は常に存在していたにも関わらず「索引」が登場し、その制作と利用が適切になされるようになるためには、長い年月と様々な文化環境が必要とされたのである。

こうした事柄を考える上で宮内庁書陵部に所蔵される『類標』⁽³⁾に注目する。本叢書は全体に及ぶ成立や基礎的事項についてすら未整理のままである。まず『類標』全体についての紹介を行った上で本叢書がもつ意義について論じることにはしたい。

二 宮内庁書陵部『類標』

宮内庁書陵部蔵『類標』について紹介する前に類標という言葉の用語を確認しておきたい。なぜなら「類標」は索引類のジャンルを示す一般名詞として使われていたようだからである。いま便宜的に、宮内庁書陵部に所蔵される一七九冊の叢書「類標」を『類標』と呼称し、それぞれの作品は「」で示すことにしたい。

『類標』は一七九冊全てが一括で整理されている。『類標』には、外題と扉題と内題が異なる書も少なからず存し、一七九冊それぞれに統一書名を付す等の処置が必要となる。しかし、一冊ずつに統一書名を付そうとしても各冊の内容が大幅に異なり、合冊されたものもある。また、索引としての形態（イロハ順か、アイウエオ順か、あるいは丁数以外で検索するものか）が異なり、書誌的にもさまざまな形態の書物から構成されている。同一書名で内容が異なるものもある。また、後に触れるように、「萬葉集類標」として整理されている類標のように、二種類の類標が混ざってしまったものもある。その整理も容易ではない。

また、『類標』内の各書には、年立や目録も含み、それらが統一的な形態を取っていないことが問題となる。『類標』内の組織については『国書総目

録』八巻「叢書目録」が先駆的な調査を行い、国文学研究資料館『日本古典籍総合目録データベース』にも独自の整理がある。これらは統一書名を付して『類標』を九五種一七九冊と認定している。しかし、外題及び内題に書名が見えないものや、冊数が複数に及ぶものや、様々な種類の書籍を同時に検索する形態をとる類標も多い。『日本古典籍総合目録データベース』はそれらを親書誌と子書誌に分けているのだが、外題の剥離によって親書誌が「書名なし」になってしまっているものや、外題と扉題と内題が異なる場合には統一書名を付すのにためらいを感じることもある。こうした問題点はあるが、一応今は外題に従って各類標を示すことにする。

類標類の利用方法については、まず次の図1を見ていただきたい。これは「袋草紙類標」および愛知県立大学長久手キャンパス図書館蔵『袋草紙』版本である。イロハの別に各項目が整理されており、それが「袋草紙」版本の巻数及び丁数と直接対応しているのである。基本的には版本の丁数で内容の位置を示すものである。後に述べるように、他の形態、たとえば人名や漢字を画数で引くもの等、異なる形態の書物もある。

この「袋草紙類標」については島津忠夫が早くに注意し、橋本不美男からの教示によって、須坂藩第十一代当主であった堀直格の元で形成されたかとしている⁽⁴⁾。これは『類標』の蔵書印及び奥書を検討することで裏付けがとれる。

巻末に『類標』全体におよぶ付表を載せた。ここから確認できるように、『類標』の大部分に堀直格の蔵書印である「花廼家文庫」と「墨阪十一代主写蔵記」の印が押されている。僅かな例外もあるが九割を越える冊子に堀家の蔵書印が捺されている事は無視できない。また蔵書印に続いて重要なのが黒河春村旧蔵書であったことを示す奥書が見られること、また春村自身が奥書を記しているものが見られることも注意される。

黒河春村は『古学小伝』に「元ヨリ諸侯ナドへ、立入ヲキラハレケリ、只堀内蔵頭ノ先候ト、奈須家ノミ、尊卑ノケザメモノキモテナシブリニ、折々ハ参ラレケリ」と記されるとおり堀直格と極めて親しく、二人の関係と書物の関わりについては浦野都志子氏の一連の業績に負うところが多い⁽⁵⁾。

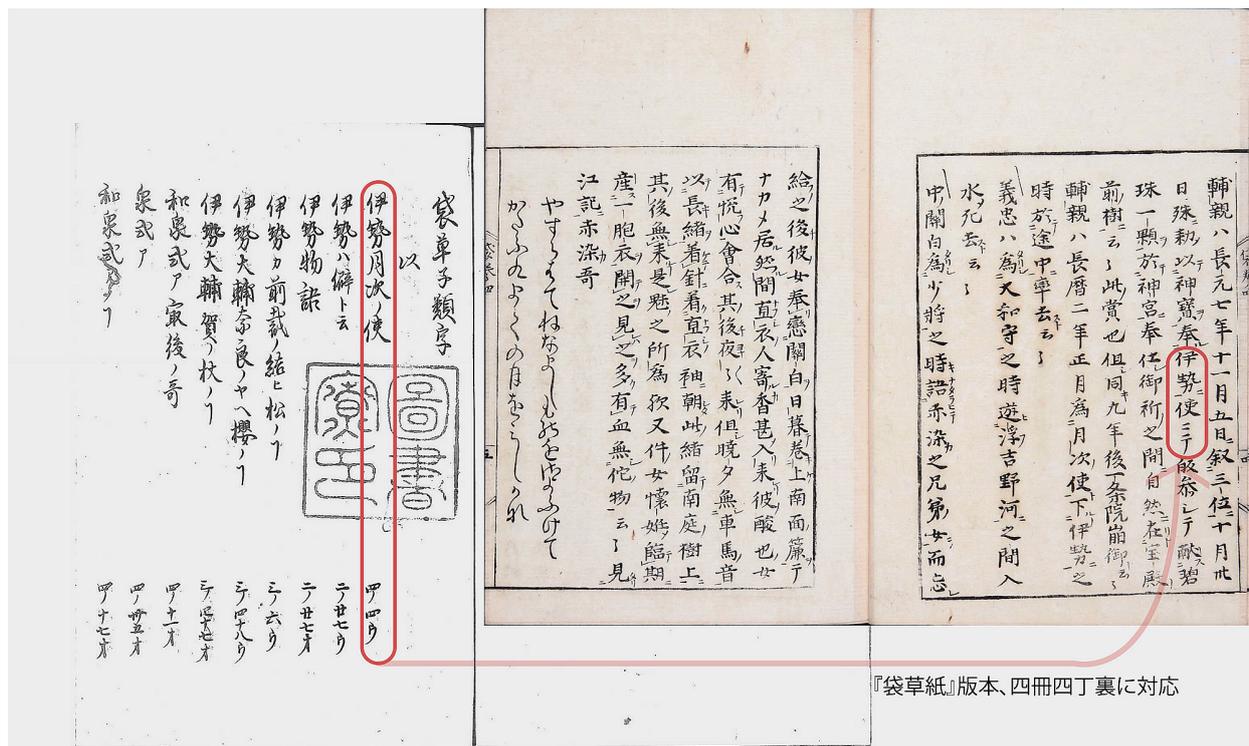


図1 「袋草紙類標」及び『袋草紙』貞享二年版本

ただ、両者の関係について深く踏み込むことは稿者の手にあまるので、いまは『類標』内の問題に限って論じることとする。まず現在の『類標』の構成における問題点を確認しておきたい。現在の『類標』には表紙右下に朱で巻数と冊数が記されているが、書陵部が受け入れた際の整理番号と美しく内容上の構成と合致しない場合が多い。

しかし、本書は黒河文庫所蔵の索引類の姿がうかがえる点で大変貴重である。内田魯庵が「典籍の廃墟―失われたる文献の追懐―」第十三章「松廼家文庫と黒川文庫」で、関東大震災の折りに黒川文庫は大きく損壊し「国学諸家の索引の自筆稿本全部」が焼失したと述べている。ここから『類標』全体は春村から提供された索引を掘家で書写したものと考えられてもいるが、必ずしもそう言い切れない草稿の冊や他所で製作された類標もあり、『類標』は複数段階をへて現在の形になったと思われる。

なお『類標』にみえるもつとも古い年号は付録⑯の「安永二年（一七七二）」、もつとも新しい年号は付録⑳「安政五年（一八五八）」である。この年までに制作された索引類が『類標』の基幹を占めているものとみてよいだろう。

三 『類標』構成上の諸問題

まず、『類標』の構成上の問題を論じる。『類標』は、形態的には扉題の有無と料紙の別で次のように分類できる。

- A型 扉題がある無罫の料紙を使う本
 - B型 罫線紙を使う本
 - C型 扉がなく、内題からはじまる本
- A型とC型はいずれも無罫の楮紙で、一段か二段の段組で記されるものが多い。A型の中には扉題と別に内題をもつ類標もあり、内題か扉題かの認定に悩ましいケースもある。ただ、扉の多くは整理のために後から付されたようにみえる。

A型の諸本は、扉題と内題が異なるケースがあり、扉題は単純に内題を拾い上げたものではない。さらにA型の諸本の中には、「柩園類纂」という外題とも内題とも異なる叢書名が扉に付されている書が二冊ある。「柩園」は

春村と親好のあつた国学者、岸本由豆流の号で、『古学小伝』『岸本由豆流』項にはその著述として「椎園類纂三十卷」の書名が見える。これは竹柏園文庫に目録の自筆稿本がある他、同じく三十六人集の類標である無窮会神習文庫蔵『卅十六人集雜纂』の他に伝存を聞かない。

B型の諸本の罫線紙は木版で版心を持つ一面十行のもの、十一行のもの、そして版心下に「穂乃屋」とある八行のもの、三種類が認められる。一冊だけ扉題をもつものがあるが、例外として今は措くことにしたい。

罫線紙と無罫紙の両方に春村自筆の花押が認められるため、春村が類標全体を罫線紙で製作しようとしたとは考えられない。春村の著作で罫線紙と無罫紙を混用する例も認められる。内閣文庫蔵『歴代大仏師譜 上』¹⁰は、『類標』と同じものではないが目録に罫線紙を利用し、本文は無罫の紙を利用してゐる。

ただ『類標』で罫線紙を使用している冊に「春村蔵書を謄写した」という奥書が見えない事は注意される。一方「山城名勝志類標」のように、春村の署名の見える罫線紙の冊はある。

罫線紙に書かれた類標は、無罫紙の類標より製作（ないし書写）が先行する可能性が高いと考えられる。その理由の一つに、「類標卷之（数字）」という内題をもつ冊子が六点みられる事があげられる。これらと先の料紙の關係は次の六種になる。

- 1 B型「栄花物語類標（上下）」 内題「類標卷之十五」
 - 2 B型「土佐日記・枕草紙類標」 内題「類標卷之十二」
 - 3 B型「山城名勝志類標付諸陵式」 内題「類標卷之八」
 - 4 B型「翻訳名義抄（他）類標」 内題「類標卷之廿一」
 - 5 B型「本草和名類標」 内題「類標卷之七」
 - 6 B型「和歌色葉集類標」 内題「類標卷之廿二」
- 他に「夫木抄類標」にも「卷之」とだけあるケースもあるが、これらは巻数を確定しなかったという制作上の都合によるものと考えられるので今は措く。右の諸書のうち「和歌色葉集類標」だけは無罫紙だが、奥書に黒河春村自筆の花押が見える。

これら巻数を内題にもつ類標は、現在の『類標』の整理ではほぼ無關係に纏められている。だが、これらの類標は春村が直格が初期に整理していたものだったのではないだろうか。「土佐日記・枕草紙類標」は一冊中の「土佐日記類標」にも「枕草紙類標」にもそれぞれ内題に「類標卷之十二」とある。これは当初の類標では作品毎ではなく冊毎に巻数をあてていたことを示すと考えられる。これらの類標各冊が春村自筆であるとは言い切れないが、春村の手によりまとめられた可能性は低くはないと思われる。便宜的にこうした内題に巻数をもつていた類標群を「初期類標」と呼称しておきたい。罫線紙を利用してゐるのも初期類標の性質と関わるのではないかと推察される。

ただし、初期類標は『類標』に収載されずに他所の所蔵となったものもある。内閣文庫蔵『添塵壺囊抄類標』¹¹は、罫線のない料紙ではあるが、巻頭に「類標第廿」とあつて、イロハ順に配列されている。本書は掘直格の蔵書目録であつた国立国会図書館蔵『花屋書院略目録』¹²に他の類標と共に著録されているが、『類標』が書陵部に入る以前に他所に流出、浅草文庫の蔵となつたことが蔵書印から知られる。識語には春村自筆花押があり、これも「和歌色葉集類標」等と同じく初期類標の一部であつたと思われる。識語には次のように記されている。

こは了阿上人手記の本をもて謄写す。たゞし、かしら書はあらたに増補しつるなり。

弘化二年八月廿日以一本比較了
(春村花押)

了阿上人は村田了阿。春村とも交流のあつた国学者である。『類標』にも了阿から借り受けて書写したという本が複数存在するが、それらには「卷之（数字）」と書かれることはない。春村は様々な人物がすでに製作していた諸類標を集成し、自らもそれに増補して初期類標を製作しようと考えていたと思しい。

その中で注意されるのが「山城名勝志類標付諸陵式」の識語（付録⑯）である。本類標は「安永二年（一七七四）」に「桜川亭」が製作したものである。「山城名勝志類標」は十一行の縦罫紙を四行に線で区切り、それぞれの地名と巻

数を示したものであるが、他の類標にみられるような丁数で示す形式ではなく巻数を記すのみ。索引としては比較的原始的な体裁であったと考えられる。

もう一つ注意されるのは「山城名勝誌類標付諸陵式」を除いて、ほとんどが「アイウエオ順」を採用している点である。これは「和歌色葉集類標」の識語(付録⑧)に記される通り「但原本は、いろは仮字もて次第せるを、かたのごとくあらため物しつ」とあることに対応するだろう。原本の『和歌色葉』は「イロハ」で配列されていたものを「型の如く改めた」という。この変更は「イロハ順」を「アイウエオ順」にしたものと考えたい。ただし、この方針は徹底されたものではなく、先にみた内閣文庫蔵『添塵瑤囊抄類標』のようにイロハ順のままにしたものもある。『類標』にアイウエオ順の配列をとるものと、イロハ順の配列をとるものが混在することは結果的にどちらの配列でも利便性に大差なかったものと思いが、類標編纂の初期に春村がアイウエオ順を志向していた可能性を指摘できるかと思われる。

現存『類標』の混乱は「萬葉集類標」群の整理をめぐる混乱からも伺える。「萬葉集類標」は『国書総目録』八巻の整理においても、『日本古典籍総合目録データベース』においても、一具のものとして扱われるが、実際には「萬葉集類標」には内題を「萬葉集類標」とする群と「萬葉類字」とする群の二系統に分れている。両者ともアイウエオ順の配列をとるが、実は「萬葉類字」群は「波(は)」以下しかなく、「萬葉集類標」群の途中から交互に挿入されているのである。「萬葉集類標」は万葉仮名毎に整理されているが、「萬葉類字」は万葉仮名の字母の違いにはほとんど注意を払わず「萬葉集類標」群に比べると整理が粗雑である。どちらにも蔵書印「花廼家文庫」と「墨阪十一代主写蔵記」があり、本来は別々に整理されていたものが、どこかの段階で混ざってしまったのであろう。

四 「掘家文庫」の蔵書印

『類標』中、多くの類標は袋綴じの大本ないし中本だが、稀に異なる体裁をもち珍しい蔵書印が捺されたものもある。こうした本を例外的なものと考えてよいのかは留保が必要だが、いまここでそれらを紹介し、『類標』の問

題を考えておきたい。なお、蔵書印のうち図書寮印は全冊にみられる為割愛する。

まず、「大日本史類標」である。外題は題簽に「大日本史類標」。24.2×16.2㎝、茶色艶出表紙。袋綴。墨付三〇丁。楮紙。「掘氏文庫」ほか、読み得ぬ印がある。奥書は次の通り。

聞書之法病。急率之時。不易搜索。因作此冊之。国字伊呂波而便於檢出云

安政五戊午冬十一月中浣 掘為(印)

この「掘為」が何者か詳らかでない。おそらくは「続花押藪類標」の掘浅掘浅と同一人物だろうと思われる。

「続花押藪類標」の書誌は次の通り。外題は題簽「続花押藪類標」。正紋艶出紺地表紙。折本包背装。24×16㎝。墨付一二丁。楮紙。「掘氏文庫」、「花廼家文庫」、よみえぬ陽印がある。奥書には、

閱。続花押藪不易搜索。故作此冊。便檢出云々

于時安政巳未年春二月中浣

掘浅掘浅為(印)

とあり、これに「掘氏文庫」印が押されていることは、折本包背装の体裁及び瀟洒な表紙と相まって注意される。両書とも「搜索に易からぬ」書物をイロハ順にして「檢出の便」をはかったというのである。

「掘家文庫」印は、信州飯田藩主掘家の蔵書印で、十一代掘親義(一八一四〜一八八〇)の時代に使用したものかとされる。掘直格の手を経ていた可能性が指摘されるが、これらは同族とはいえ信州須坂藩以外でも類標類が制作・所蔵されていた可能性を示すものであろう。¹³⁾

五 「索引」の思想

『類標』には、しばしば底本に何を採用したのか、それをどのように改訂したのか、あるいは改めなかったのかの凡例や、校訂や増補について奥書に記す記述がみられる。次は「吾妻鏡要目集成」(14)の凡例である。凡例は大きく三条に分かれている。

一つ目は、

版本東鑑ヲ本書トシ、何卷ノ何枚目ノ表裏、何行目ト云符節ヲ以、見出ノ便トス。

として、版本を採用し、採録する記述は「何巻、何枚目、表裏、何行目」という細かい符節を設定すること。二つ目は、

本書仮名誤アリ。今此書ニ改ル時ハ、版本見出ノ便ヲ失フ。因テ今爰ニ不_レ改。

として『東鏡』版本には仮名遣いの問題があるものの、それを改めてしまった場合には「見出しの便」を失ってしまうのでこれは訂正しないとすると、三つ目は、

本書誤字甚多シ。因テ別ニ本書ノ每卷小冊ヲ付録シ。誤字ヲ訂証シ、姓名ノ闕ヲ補ヒ、月ノ大小錯ト、支干之訛ハ_{以皇和通曆}改メ之。日月蝕ノ脱_{以曆算改市}改ム之。

として、誤字については誤字を訂正し、干支の誤りを改め、日月食の脱落も改め、日時のあやまりも直すと言う方法をとっている。他に特異な異体字についても訂正はしないということを指示しているが、この凡例からは版本を基準として、内容の検出に特化する為、誤りも正さなくておくとの方針が伺える。こうした発想は恐らく類標全体に拡張して理解することが出来る。「土佐日記・枕草紙類標」からは底本の採用に本文異同への配慮があったことが伺える。

此ふみ素本注本くさぐさあれど、今は加藤磯足が校異本によりつ。これは諸本の異同どもしるしたれば、ことにたよりもよみしくやとなり。

これは底本に文政三年（一八二〇）刊、加藤磯足『校註土佐日記』（土佐のにき）に依拠したということである。これは頭書に諸本の異同を示した校異本である。「枕草紙類標」では、

右、枕のさうし類標は、池田市万侶か物せるなり。た、し春曙抄を土代とせり。こは搜索のたよりよろしければなるべし。

として北村季吟『春曙抄』を底本にした理由が書かれている。別にもう一冊ある「枕草子類標」でも『春曙抄』を使われている。これは搜索の便りに

よいからだ、と述べられる。これらの言明から、類標には本文や事項の搜索を第一義として底本を決めるという態度が見て取れる。また、「遊仙窟類標」の序跋には次のようにある。

巻中記しつくる所の丁数は、慶安五年に版にゑりて世間に流布せる注本なり。

慶安五年刊本が「世間に流布せる注本」であったとわざわざ記すのは、類標においては流布本であることが重要な要素だったからである。

これらは本文研究それ自体に長い歴史をもつ物語や随筆といった文学作品にも適用される。「紫和讚弁中（他）類標」は凡例で次のように索引の底本と略号を定めている。

紫 紫式部日記傍注本 丁付

泉 和泉式部日記扶桑葉第五

讚 讚岐典侍日記類集本第三百廿二

弁 弁内侍日記上下 同三百廿三上下

中 中努内侍日記 同三百廿四

枕 枕草子 春曙抄本

枕イ 後光厳院宸翰枕草子 類従本第四百七十九上下

カ 蜻蛉日記 解環本

ツ つれく草 鉄槌本

これらの諸本のうち、異本枕草紙、讚岐典侍日記、弁内侍日記、中務内侍日記が『群書類従』、和泉式部日記が『扶桑拾葉集』所収本に依拠していることから、あくまでも流布本、校訂が施された刊本に依拠するという意思を読みとることが出来るだろう。ある特定の一冊の本の——写本——検索を目的としたものではなく、他の人に渡ったとしても利用を妨げられない事が、索引にとつて重要な性質だからである。

春村が村田了阿から借りて写した本が何冊もあることも、これを裏付けする。もし特定の二冊の写本だけが検索の対象であったならば索引の貸し借りは無意味だろう。

そもそも、もし写本を底本にしていた場合、諸本で字詰や改行で丁数が大

きくずれこむため、原本が失われた場合には丁数での検索は不可能になる。類標は原本の通りに項目を抽出するわけではないので、底本が失われた場合にはその内容を伺う資料としてすら価値がなくなってしまう⁶⁾。

もう一点、類標の制作過程を知る上で注意される本が「諸家花押類字」(上



図2 「諸家花押類字 上」一丁表

中下三冊)である。これは、仮綴じの包背装、共紙表紙外題に直書で「諸家花押類字」と書かれた三冊本で、丁数は、上二四丁、中二五丁、下九丁となっている。料紙は楮紙。文書の反古紙を使っている。これが注意されるのは、人名と丁数を切り抜いた押し紙が大量に張り込まれており、類標が清書される前の形が伺えるからである。ここには入れ替えの校正記号や途中で追加された人名などが見える。押し紙は複数人の筆跡が見えることから、ある程度人数が動員されて制作されたことが伺える。

六 江戸後期国学者の考証と検索

『類標』識語類から伺える人物を拾い上げると次のようになる。黒河春村(二七九—一八六六)、堀為/堀浅為(未詳)、香山榊原一学長俊(二七三四—七九八)、西田忠禮(未詳)、「林」忠満、○「塙」忠瑤(二八〇八—一八六三)、(塙保己一(二七四六—一八二二)、池田市万侶(未詳)、○松屋翁・小山田与清(二七八三—一八四七)、○一枝堂・村田了阿(二七七一—一八四三)、○山崎知雄(二七九八—一八六二)、秋田正訓、小野由久(未詳)、桜川亭(未詳)、大幻窟龜岳(未詳)、石橋真国(二八〇七—一八六七)。

これらの内、○を付したのは『古学小伝』に黒川春村と親しく交流したと書かれる人物である。塙忠瑤、塙保己一は黒河春村が務めていた和学講談所に関わる人々である。香山榊原一学長俊は榊原香山(一七三四—一七九八)。當時名の知られた武器故実有職家であった。本多甲馬藤忠憲は本田忠憲(一七七四—一八二三)。伊勢神戸藩主本多忠永の六男で、彼も有職故実家である。両者は春村と直格に直接の交流があったのか確認できないのだが、彼らがすでに作成していた類標を春村が直格が入手したのだろう。池田市万侶、秋田正訓、小野由久、桜川亭、西田忠禮は共に未詳。諸賢の教えを請う。

こうした人々が事前に作り上げていた類標群(索引群)を春村、あるいは直格が入手し、再整理したり、増補したりして類標を叢書にまとめようとしていた。

こうした類標群の性質は当時の考証学的志向と合致するものである。春村とも交渉のあった小山田与清は『慶長以来国学家略伝』に「与清の学最編摩

に長じ、古今の事物をいろは字に類聚し、以て搜索に便ならしめしもの若干巻を撰み、以て属稿の資に供す、故に筆を操て立どころに文をなし、而して考証精核なりければ、人其の該博に驚かざるはなしと云ふ」とあるように、目録、索引学者として多数の索引を作り江湖の碩学に大きな影響を与えた。春村の『碩鼠漫筆』、堀直格の『扶桑名画伝』における博引旁証もこれらの索引類によって可能になったものであろう。

これら索引は秘蔵されたものではなく、人に貸し出されたものであったらしい。『類標』に収載される書が他所にも写本として所蔵されていることはそれを端的に裏付けるだろう。『類標』からもそれが伺える。たとえば「夫木抄類標」は奥書に「夫木工師抄」としてその名が見え、本来はこれが正しい作品名であったと覚しい。『夫木工師抄』は他に筑波大学（旧東京教育大学付属図書館）所蔵の三冊本の零本がある。その巻廿一奥の押紙には次のようにある。

右、工師抄地名之部三巻。十九・廿一両巻、松屋翁所蔵本於東京都客舎借覧。正月廿七日起筆。二月七日写功。二十之巻。或人写本於京都客舎借覧。四月十二日起筆。同月十五日。写功。

弘化二年乙巳年 立野良道

この記述と「夫木抄類標」の奥書を照らし合わせると、書写は同年。筑波大学蔵本では松屋翁こと小山田与清が所蔵していた本であったかのように書かれているが、おそらくは与清自身が制作したものだだろう。与清は自ら作成した索引類の書写を許していたと覚しい。春村もこうした索引のネットワークの中で類標群を収集・増補していた。それをさらに掘家で追加収集したものが現在の『類標』なのである。

七 おわりに

『類標』の諸相を縷々論じてきたが、この『類標』は、春村が作成していた類標に、後の段階で集められた類標が加えられ、さらにその後書陵部内で整理されたものであったことは明らかにできたかと思う。『類標』という形で整理されまとめられた意義を最後に考えてみたい。

この類標という「索引の形式」は、丁数で内容の位置を示すことが当然である状況にあって初めて意味をもつ。索引として立項される語は底本の言葉そのままではない事がしばしばある。細かい凡例を示す「遊仙窟類標」や「吾妻鏡要目集成」だけではなく、凡例のない「枕草紙類標」においてもそれは変わらない。中西健治は「枕草紙類標」が底本を「春曙抄」であることを明示しながらも、実際に検討してみると「春曙抄」と合致する文言が少ないことを指摘している²⁰。これは重要な指摘だと思われる。実際、『類標』を眺めているとよく「の事」といった索引語を見かける。こうした「の事」といった事象や概念、古記録であれば首書にされるような言葉こそが検索する上では知りたい情報なのである。これらの語句が索引語として立てられるのは、すなわち本文そのものを直接通読して調べなくても、知りたい情報が書かれる場所に行くことができるという信念の存在を表している。

これは原則的に本文の抄出で形成される類書とは異なる検索の理念なのである。これは索引の取り方が違ったとしても、本文そのものは不変であるという信念がなければ成立しない。「類標」から本文を復元できなくても構わない。本文の（バックアップ）が他にあるのだから。こうした思想は版本の普及によって、本文が同一である他の本が複数ある状況が共有されて初めて可能になったのではないだろうか。

少し大きい見通しを述べれば、類標群の、悪くいえば粗雑な索引語のとりかたは、版本の登場と普及によって、部類から索引への思想の転換が起きたことを示している。索引の登場は、他の人、他の人物が同じ内容、同じ割り付け、同じ丁数に同じ情報が書かれている別の、しかし同じ内容の本を所持している、という「常識」²¹の登場と並列的な関係にある。

こうした認識は恐らく諸作品が写本で流通する中世期以前には生まれにくかったのだろう。写本では袋綴か卷子本かで「丁数」という概念の有無すら変ってしまう。たとえ精密な謄写本同士であっても、綴じ間違いや丁のめくり飛ばしなどが発生すればあつげなく丁数がずれてしまうだろう。丁数が内容を示す「鍵」となるためには、版本の流通と普及が絶対的に必要だったのである。写本から版本への流通形態の変化が人々の、そして学芸に何をもた

らしたのか。そうした事字の一端として『類標』に注目することには大きな意味があるだろう。

【付記】

本論文は Early Modern Japan Network2016 (AAS) における英語での口頭発表 SEARCHING THE CLASSICS : FROM THE AGE OF MEMORY TO THE AGE OF THE INDEX. の主に前半部を成稿したものである。席次貴重な御意見を賜った先生方に厚く御礼申し上げる。貴重な資料の閲覧と掲載を許された宮内庁書陵部、国立公文書館内閣文庫および筑波大学附属図書館、愛知県立大学長久手キャンパス図書館他、各所蔵機関に深く御礼申上げる。引用本文は私に清濁、句読点を付して原則として通行字体に改めた。

引用本文は以下の通り。明月記は『冷泉家時雨亭叢書別巻二 翻刻明月記一 自治承四年 至建永二年』(朝日新聞社、二〇一三)、『古学小伝』、『慶長以来国学家略伝』は芳賀登他編『日本人物情報大系 四三巻』(皓星社、一九九七)の復刻。『類標』は国文学研究資料館所蔵の紙焼き写真によった。

【付録】序跋及び奥書識語

本付録は『類標』の付表の奥書及び序跋を翻刻したものである。「本草和名類標」「遊仙窟類標」等の長文の序は紙幅の都合上中略したものがある。本文中の○番号は本付録及び付表に対応する。字配りは原則本文のママとしたが割注は細字で記し行替は再現していない。黒河春村の花押は(春村花押)と記した。字体は原則として通行字体に改めた。

① 以黒川春村蔵本謄写之

② 聞書之法病急率之時不易搜索因作此冊之因字伊呂波而便於檢出云
安政五^{戊午}冬十一月申流 掘為

③ 此書ハ東鑑ノ中所レ引之和漢古書ノ文ヲ抄、出シ其義ヲ弁^レ積^ス又積^レ典ニ出ル官名之唐名ニ効モ又爾ス凡武事ノ古実戦功闘死号馬遊覧及天変地妖神異奇、怪等悉取メテ而

宮内庁書陵部蔵『類標』をめぐって

不^レ漏^ス漏^サ天^ノ部 人^ノ部 異賊^ノ部 言語^ノ部 地^ノ部 異名^ノ部 右六等ニ事類ヲ分チテ俱ニ其文字之訓ノ仮名ノ頭字ヲいろは仮名ニ配当シテ集解ス 版本東鑑ヲ本書トシ何巻ノ何枚目ノ表裏何行目ト云符節ヲ以見出ノ便トス

一本書仮名誤アリ今此書ニ改ル時ハ版本見出ノ便ヲ失フ因テ今爰ニ不^レ改

一本書誤字甚多シ因テ別ニ本書ノ每巻小冊ヲ付録シ誤字ヲ訂正シ姓名ノ闕ヲ補ヒ月ノ大小錯ト支子之訛ハ以皇和通曆改^レメ之日月蝕ノ脱

以曆算改^レ申 改^レム共何巻ノ何行目ノ幾字目トシルシテ見出ノ便トス 讀^ニ東鑑^一者左^ニ本書^一 右^ニスル此書^一 則ハ自ら

當^レ悟^ニ其誤字^一 其中有^レ東鑑^一 惟用^レ之其他所^レ未^ニ見^一 經見^ニ之省字^一 (中略) 構ヲ作^レ構等数多アリ間々又古

書ニ所^レ見ナリ當時通用ノ俗字ナルカ所^レ不^レ知也 因テ不^ニ訂証^一 略拔^ニ出^一 数字^一 使^レ讀者知^ニ其字之所^一 異同^ニ云爾

寛政四年壬子四月 香山榊原一学長俊撰

④ 右要目集成上下二卷以西田忠禮之本令謄写了
天保四年九月廿三日 忠満

⑤ 右知譜拙記画分目錄一冊天保九年秋八月抄了忠瑤

⑥ 右記録考文化三年^{丙午}上京之御
以松木入道殿本於旅亭書写
保己一成

⑦ 六月廿一日畢

⑧ 右は一枝堂翁手沢の本を借得て写しつ但

原本はいろは仮字もて次第せるをかたのごとく
あらため物しつ

天保十四年四月

(黒川春村花押)

⑨ 昔藤原長清朝臣。採詞華摭言葉。命以夫木。蓋中斷扶桑。各用其序。粵有松屋翁。拾其屑集其佛。聚積日久。鬱然成堆。而以筆為片斧。運之以繩墨。部類以分。一閱瞭然。命曰夫木工師抄也。工師工師實其勞矣。予適得写之。為題序言。以記其勞云、此書地理部是得故題于此

弘化二年仲夏下旬

藤原春村

⑩ 催馬楽

我駒 沢田川 貫河 東屋

大路 鶏鳴 逢路 陰名

道口 河口 奥山 奥山尔

鷹山 此殿迺 此殿奥 我家

白馬 鈴香川 大官 妹川

以上十六曲古本にのせずされは梁塵愚案抄によりて

これをも抄録す古本を片仮名もてかき愚按抄をは

平仮名をもてかけりこれをもてけぢめとすへし

⑪ 以黒河春村蔵本写之

⑫ 土佐日記は仮字ふみのおやにして今はた道の記をかゝんにはさらなりさらぬふみつゝらんにもかならず此すかたをなんまなふ人をれはいかてそれかたよりにもとておなしこと葉ともつとへあはせて草曆文庫の類標にくはへり
此ふみ素本注本くさくあれと今は加茂磯足か校異本によりつこは諸本の異同としるしたれはことにたよりもよろしくやとてなり

秋田正訓

⑬ こはいと四度計なきふしとも、みゆれとさはれかりそめことをさのみやはとかむへきとてそれかとしのかんな月なぬかの夜さなからにうつし物しつ

(春村花押)

⑭ 右枕のさうし類標は池田市万侶か物せるなりた、し春曙抄を土代とせりこは捜索のたよりよろしければなるへし

天保十一年六月

(春村花押)

⑮ 十八年九月廿四日

校合

小野由久

五拾五丁

⑯ 抑栄花物語は赤染衛門か筆作にして帝の御代年のなもた、しく記せは真名ならねと世々の国史につきたる心なるへしされとかな物語のさたなれは一つ、に書つ、けて移り行年月とみに見あすにまきはしきま、一條の禪閣の源氏物語に年立を事置たひしにならひて此二帖に事付てへりぬ也かの又は作り物語なれば年の名もなきま、先君薫大将の御としをもとにたて、するし様なれはかくは名付給しならん是は夫にはことかわりぬれと其例にしたかひしま、外に名をもとめず栄花物語の年立と事付置しは桃花のふかき香をしたふころなりとそ延享のはしめのとしの冬 平徳平誌

十八年九月廿四日

校合

小野由久
五拾五丁

⑰ 山城名勝志者故事ヲ尋ルニ便アル書也然共
尋ルニ其有所ノ郡出ル所ノ巻知レサレハ見出ス
に勞ス依テ本略目錄残ラス残ラス伊呂波分ニシ
テ見出スニ安カラシム神社寺院旧蹟等其
名目ニ属シ本書目錄ニ不出者モ一二ヲ挙
テ悉クハ不記又実名地名者文字ニ不拘
訓ヲ以テ略記ス見ル人是ヲ可弁分矣

安永二年 丙 六月十五日 桜川亭

⑱ 此一卷は狩谷翁の年ころもたまへかしを本書にすへてわれに
たまはせられぬ 石橋真国
こは真国か本もて写しものしつた、し原本はいろは仮字もて
ついたれと今写すとて五十字音のならひにあらためかつ
錯誤せるところくはいさゝか訂正をもくはへものしつ
天保十二年六月 (春村花押)

⑲ 右諸陵式類標者以山崎和雄手記之本令謄写
之了 (春村花押)

⑳ 积家人名録共三終

㉑ 古今著聞集類標六卷終
維時弘化三丙午歲晚秋抄功了

大幻窟龜岳

㉒ 遊仙窟はいとみたりかはしきこと、ものみ書つゝりたればさの

宮内庁書陵部蔵『類標』をめぐって

み珍重すへきことはなしと世にはかたふくひともあめれと
そはいふにしもたらぬ業にて此ふみ文章のめてたきのみ
かはその訓点はた古言とおほしきかおほくてかならず
古学の證とすへきこと少からずされは其おほよそを類語し
て搜索のたよりとす

(中略)

本書おなし訓点のみたひまはし出さるはことくく
その丁数を記して其餘論太なとやうにあまた、
ひみえたるは多見とのみ記せりこは紙中所せくて
わつらはしければなり
繩堂舎など両点の文字もすくならねとそれつと
に記しつけんは中々にまきはしけなれば
今はかたみに省略して安之部にはあみきぬとの
み出し伊之部にはいとすちとのみ挙たり
字音もをりくましへ挙たりされとこれはたゝも、
かひとつのみ
巻中記しつくる所の丁数は慶安五年に版に
ゑりて世間に流布せる注本なり

㉒ 遊仙窟類標終

㉓ 以黒河春村蔵本謄写之

⑳ 此書はもと了阿聖のすさひなるを誰やらむ
増補などしつる本にて静慮のをみのつたへ
もたるを老翁よりこひ得て写しつるなりたゝし
事物類字はもとの名にて今ひしりの清書の本
には秋林枝葉とあらため題せりかみのくたり藍を
もて書いれしつるはその清書本はたひしりに
乞もてこたひ我校合せるなり

天保十四年三月 黒河春村

㉔ 関続花押藪不易搜索故作

此冊便檢出云々

于時安政^巳未年春二月中浣

掘浅為

(26)
(前略)

さてこの類標は山崎知雄か物しつるをかり得て写しつ首書他書等の増補はいまおのれかくはへつるなり 春村

(27)

邁世之諸侯衆賢編著之雜史家兼其所記之說般々粉々而覽者或焉令把庫藏之策子涉獵之則晴不能別矣故抄録于事々物々私作目次分之以国字四十八焉是欲令便于凡丁之索搜而已

文化四年丁卯九月

本多甲馬藤忠憲

(28) (34)
以黒河春村蔵本模写之

注

- (1) 拙稿「通読する歌学書、検索する歌学書」〔RIRAS Journal〕二二・二〇一四・十一）参照。
- (2) 二〇一六年五月三〇日閲覧確認。
- (3) 函架番号・4041 45812（一括）。
- (4) 『島津忠夫著作集 第七卷』第五章『袋草紙——その影響と研究史——』注18（和泉書院、二〇〇六）。掘直格の蔵書については、恵光院白「掘直格の著編とその蔵書目録群の相貌」〔文献探索、二〇〇七、二〇〇八〕、同「掘直格公——文庫の概要」〔須高、六九、二〇〇九・二〕、浦野都志子「掘直格編『花屋書院略目録』」〔汲古、四一、二〇〇二・六〕、田子修一「幻の『花廼家文庫』を求めて（上）——『花屋書院略目録』と『花廼家文庫』の概略」〔須高、五八、二〇〇四・四〕を参照。
- (5) 浦野都志子「遊仙窟」と黒河春村「汲古」五〇、二〇〇六・一二）に「類標」について触れられている。また、将来的に類標について論じたいと注で触れられているが、その後「類標」に関する網羅的な論文を公表されているのか、管見に入

らなかった。浦野氏の研究を待つて本稿を公表するべきかとも考えたが、十年間の月日を経たこともあり、本稿を成稿した。同「歴代残闕日記」について「汲古」三九、二〇〇一・五）でも黒河春村と掘直格の関係が論じられている。

(6) 一部に捺された蔵書印から明治一八、一九年頃のことかと推測される。

(7) 野村喬編『内田魯庵全集 八巻 隨筆・評論 IV』（ゆまに書房、一九八七）所収。浦野注（5）論文参照。

(8) おそらくは書陵部蔵本の転写本であろう。浦野注（2）前掲論文（1）参考。

(9) 函架番号・157—82。

(10) 函架番号・210—37。整理名は「類標」。

(11) 函架番号・202—38。

(12) 『内閣文庫蔵書印譜』「掘直格」項（内閣文庫、一九六九）。

(13) 早稲田大学図書館蔵本他、他の写本にも同じ凡例がみえる。

(14) 近世を通じて『和泉式部日記』が流布本『扶桑拾葉集』を通じて享受されたことは、岡田貴憲「扶桑拾葉集」所収『和泉式部物語』の本文——主要伝本の関係と諸本混成の実態——（『国語国文』八五上二、二〇一六・二）参照。

(15) 本混成の実態——（『国語国文』八五上二、二〇一六・二）参照。

(16) ただし、外記日記類など開版が確認できないものの類標も存する。それらは史書に偏る傾向があり、今は国書類に限定して論じておきたい。

(17) 黒川真頼校訂『碩鼠漫筆 墨水遺稿』（吉川弘文館、一九〇五）。春村自筆本は実践女子大学黒川文庫に所蔵。

(18) 藤原直格、高頭忠造編、黒川真頼校訂『扶桑名画伝』全十巻（哲学書院、一九八九）。一部散逸。宮内庁書陵部に自筆稿本が八冊原本六六冊。東博に黒河春村写六〇冊が架蔵。

(19) 函架番号・ネ304—32。

(20) 中西健治「枕草紙春曙抄」索引の形態——「類標」「類語」をめぐって——（『相愛大学研究論集』七、一九九一・三）。

(21) この「常識」という言葉は若尾政希の「政治常識」という概念に依拠している。若尾政希『安藤昌益からみえる日本近世』（東京大学出版会、二〇〇四）参照。「常識」とは、ある集団が書物などの媒介によって共通して持つ信念のことで、この場合は版本の流布によって「他の人も自分と同じ読書環境を共有している」という信念が、少なくとも国学者たちの間で普及していたことを示す。

【付表】

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
1	皇大神宮儀式解類 字	1	皇大神宮儀式解類 字		C	1	イロハ順		①	図、
2	祝詞考類標 全	2	祝詞考	祝詞考類標	A	1	イロハ順			花、図、墨
3	神祇、帝王部	3	神祇部	神祇部／帝王部	A	2	寺社、行事、イロ ハ順			図、墨
		4	帝王部				帝位、行事、不予 等			
4	后妃、儲官、帝戚、 宴賀、官職部	5	后妃部	后妃部／儲官部／ 帝戚部／宴賀部／ 官職部	A	2	后名、夫人名等			図、墨
		6	儲官部				皇太子、皇太弟等			
		7	帝戚部				皇子、諸王等			
		8	親王諸王名類字				アイウエオ順			
		9	宴賀部				宴饗、大舗等			
		10	官職部				官職、位階、雑等			
5	(ナシ)	11	地名部	地名部／石部／水 部／火部	A	2	国号、国名、地名、 アイウエオ順、等			図、墨
		12	石部				石、磐等			
		13	水部				水、波等			
		14	火部				火、烟、薪等			
6	(ナシ)	15	天部	天部／歳時部／地 部	A	2	天、日、月等			図、墨
		16	歳時部				曆、歳等			
		17	地部				地、国等			
7	(ナシ)	18	布帛部	布帛部 服飾部／ 飲食部 器財部／ 薬石部 五穀部／ 草部 木部／鳥部 獸部／虫部 魚部	A	2	錦綾、緒布等			図、墨
		19	服飾部				冠、朝服等			
		20	飲食部				飲食、飯等			
		21	器財部				鏡、鐘等			
		22	薬石部				薬、薬物			
		23	五穀部				稻、備穀等			
		24	草部				草、萩等			
		25	木部				木、坂樹等			
		26	鳥部				鳥、鳳、孔雀等			
		27	獸部				獸、麒麟等			
		28	虫部				虫、龍等			
		29	魚部				魚、鯨等			
8	(ナシ)	30	釈道部	釈道部 道教部／ 靈異部 災異部／ 方術部 工芸部／ 諸工部 居処部／ 産業部 珍宝部／ 舟車部 漁獵部	A	2	仏法、仏像、僧名 (アイウエオ順) 等			図、墨
		31	道教部				仙、			
		32	靈異部				靈異、天狗等			
		33	災異部				地震、災等			
		34	方術部				方術、医等			
		35	巧芸部				相撲、博戯等			
		36	諸工部				工、矢作等			
		37	居処部				京邑、遷都等			
		38	産業部				農、桑			
		39	珍宝部				財宝、金銀等			
		40	舟車部				舟、舟具等			
41	漁獵部	漁獵、漁獵具等								
9	(ナシ)	42	言語部	言語部	A	2	言語、諺、言詞 (ア イウエオ順)			図、墨
10	人名、姓氏部	43	人名部 類字	人名部／姓名部	A	2	アイウエオ順			図、墨
	(ナシ)	44	姓名部				姓氏、氏上、諸氏 (アイウエオ順)			

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
11	(ナシ)	45	異域部	異域部／職貢部／ 人部	A	2	異域、唐等			図
		46	職貢部				異俗、蝦夷等			
		47	人部				君臣、聖賢等			
12	(ナシ)	48	封爵部	封爵部 政術部／ 賦役部 礼儀部／ 楽部 文学部／武 備部	A	2	食封、給地等			図、墨
		49	政術部				政、律令等			
		50	賦役部				税租、徴庸等			
		51	礼儀部				朝礼、礼儀等			
		52	楽部				楽、歌等			
		53	文学部				文学、書籍			
54	武備部	軍事、兵庫等								
13	日本後紀類字 全	55	日本後紀類字		C	2	イロハ順、雑			図、墨
14	続日本紀類字 全	56			C	2	イロハ順、雑			図、墨
15	国史類名 続日本 紀ノ部ア行 一	57	国史類名／続日本 紀	国史類名卷之四／ 続日本紀之部一／ 阿伊宇衣於	A	1	アイウエオ順（項 目別）			図
16	国史類名 続日本 紀ノ部カ行 二	58	国史類名／続日本 紀	国史類名卷之五／ 続日本紀之部二／ 加伎久計古	A	1	アイウエオ順（項 目別）			図
17	国史類名 続日本 紀ノ部サタ行 三	59	国史類名／続日本 紀	国史類名卷之六／ 続日本紀之部三／ 左志須世曾／太知 豆低登	A	1	アイウエオ順（項 目別）			図
18	国史類名 続日本 紀ノ部ナハ行 四	60	国史類名／続日本 紀	国史類名卷之七／ 続日本紀之部四／ 奈仁奴祢乃／波比 夫幣保	A	1	アイウエオ順（項 目別）			図
19	続日本後紀類標 全	61			C	2	イロハ順、雑			図、墨
20	釈日本紀類標 付 大八洲記	62	釈日本紀		C	1	イロハ順			図、花、墨
		63	大八洲記			2	イロハ順（地名、 詞）			
21	三代実録分類 一	64	三代実録分類巻一		C	1	天文門、地理門、 居処門			図、墨
22	三代実録分類 二	65	三代実録分類巻二		C	1	神祇門（神名、イ ロハ順）			図、墨
23	三代実録分類 三	66	三代実録分類巻三		C	1	帝王門（即位等）、 人物門（項目別、 イロハ順）			図、墨
24	三代実録分類 四	67	三代実録分類巻四		C	1	官職門、政理門等			図、花、墨
25	三代実録分類 五	68	三代実録分類巻五		C	1	釈道門（梵利、イ ロハ順）、外蕃門 等			図、花、墨
26	文徳実録類標 全	69			C	2	イロハ順、雑			図、墨
27	大日本史類標 完	70	大日本史類標		D		頭書イ ロハ順 で内容 は追い 込み イロハ順		②	図、堀氏文 庫、その他 三つ
28	吾妻鏡類標 上	71	東鑑		C	1	イロハ順			図、墨
29	吾妻鏡類標 下	72			C	1	イロハ順、雑			図、墨
30	吾妻鏡要目集成 上	73		吾妻鏡要目集成 上	D	1	イロハ順	③		図、花、墨
31	吾妻鏡要目集成 下	74		吾妻鏡要目集成 下	D	1	イロハ順	④		図、花、墨
32	平家物語類字 長 門本	75	長門本平家物語類 字	長門本平家物語	A	1	イロハ順			図、花、墨
33	平家物語類標	76	平家物語類字	平家物語類字	A	1	イロハ順			図、花、墨

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
34	諸家知譜拙記画引 ／同伊呂波引 全	77	諸家知譜拙記目録		B	1	画数順		⑤	図、花、墨
		78			B	2	イロハ順			
35	尊卑分脉脱漏画引 便覧 全	79	尊卑分脉脱漏画引 便覧		B	1	画数、字順			図、花、墨
36	公卿家伝目録 全	80		公卿家伝目録。人 名目録	A	1	アイウオエ			図、花、墨
37	家記類字目録 完	81			C	1	イロハ順		⑥	図、花、墨
38	外記日記類標	82			C	1	イロハ順			図
39	明月記／親元日記 類標	83		明月記／親元日記	A	1	丁数順		⑦	図、花、墨
		84	親元日記		A	1	丁数順			
40	家長日記 四季物 語／義経記 室町 日記 類標	85	家長日記	家長日記／四季物 語／義経記／室町 日記 類標	A	1	イロハ順			図、花、墨
		86	四季物語類字		A	1	イロハ順、雑			
		87	義経記類字		A	1	イロハ順、雑			
		88	室町殿日記		A	1	イロハ順			
41	覚明注三教指帰／ 二中歴 類字	89	覚明注三教指帰類 字	覚明注三教指帰類 字／二中歴類字	A	1	イロハ順			図、花、墨
		90	二中歴類字		A	1	イロハ順			
42	三十六人集類標	91		家集一／三十六人 集／権園類纂	A	2	アイウエオ順			図、花、墨
43	夫木集目録 全	92		夫木集目六 全	A	2	イロハ順			図、花、墨
44	色葉集／一葉抄 目録 全	93		色葉集／一葉抄／ 和歌抄物目六	A	2	イロハ順			図、花、墨
45	紫和讃弁中／枕 異枕 蜻 徒 類 標	94			C	2	アイウエオ順			図、花、墨
46	和泉 紫 讃岐 弁／中努 堯孝 玄与 宗長 類標	95	日記書類字		C	1	イロハ順			図、花、墨
		96	日記類々字		C	1	イロハ順			
47	和歌色葉抄類標 全	97	類標卷之廿二 和 歌色葉集	和歌色葉抄類標	A	2	アイウエオ順		⑧	図、花、墨
48	八代集類標 全	98		撰集一／八代集／ 権園類纂	A	2	アイウエオ順			図、花、墨
49	八代集類標 一	99		八代集一 あいう えお	A	1	アイウエオ順			図、花、墨
50	八代集類標 二	100		八代集二 かきく けこ	A	1	アイウエオ順			図、墨
51	八代集類標 三	101		八代集三 さしす せそ たちつと	A	1	アイウエオ順			図、花、墨
52	八代集類標 四	102		八代集四 なにぬ ねの はひふへほ	A	1	アイウエオ順			図、花、墨
53	八代集類標 五	103		八代集五 まみむ めも やゆよ ら りれ／わるゑを 地名 人名	A	1	アイウエオ順			図、花、墨
54	袖中抄類標	104	袖中抄類字	袖中抄	A	1	イロハ順			図、花、墨
55	夫木鈔類標 地名 上	105	夫木抄類標卷之	夫木抄類標 地名 上	A	1	地名 (イロハ順)			図、墨
56	夫木鈔類標 地名 中	106	夫木抄類標卷之	夫木鈔類標 地名 中	A	1	地名 (イロハ順)			図、花、墨
57	夫木鈔類標 地名 下	107		夫木鈔類標 地名 下	A	1	地名 (イロハ順)		⑨	図、花、墨

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
58	神楽催馬楽風俗歌 堀川初度百首／山 家集 守武千句 拳白集 類標	108	古本神楽催馬楽風 俗歌類字	神楽催馬楽風俗歌 ／堀川初度百首／ 山家集／守武千句 ／拳白集	A	1	イロハ順	⑩		図、花、墨
		109	堀河初度百首類字		A	1	イロハ順			
		110	山家集類字		A	1	イロハ順			
		111	守武千句		A	1	イロハ順			
		112	拳白集類字		A	1	イロハ順、雑			
59	萬葉集類標 阿	113	萬葉集類標卷之一 阿上		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		114	萬葉集類標卷之二 阿中		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
		115	萬葉集類標卷之三 阿下		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
60	萬葉集類標 伊	116	萬葉集類標卷之四 ／○伊 上		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		117	萬葉集類標卷之五 ／○伊 下		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
61	萬葉集類標 宇衣	118	萬葉集類標卷之六 ／宇		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		119	萬葉集類標卷之七 ／衣		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
62	萬葉集類標 於	120	萬葉集類標卷之 ／○於		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
63	萬葉集類標 加	121	萬葉集類標卷之 ／加 上		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		122	萬葉集類標卷之 ／加 下		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
64	萬葉集類標 伎久 計	123	萬葉集類標卷之 ／○伎		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		124	萬葉集類標卷之 ／○久		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
		125	萬葉集類標卷之 ／○計		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
65	萬葉集類標 古	126	萬葉集類標卷之 ／○古		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
66	萬葉集類標 佐之	127	萬葉集類標卷之 ／佐		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		128	萬葉集類標卷之 ／○志		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
67	萬葉集類標 須世 曾	129	萬葉集類標卷之 ／○須		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		130	萬葉集類標卷之 ／世		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
		131	萬葉集類標卷之 ／○曾		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
68	萬葉集類標 多	132	萬葉集類標卷之 ／○多		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
69	萬葉集類標 知都	133	萬葉集類標卷之 ／知		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		134	萬葉集類標卷之 ／都		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
70	萬葉集類標 天登	135	萬葉集類標卷之 ／○天		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		136	萬葉集類標卷之 ／○登		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
71	萬葉集類標 奈	137	萬葉集類標卷之 ／○奈		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
72	萬葉集類標 尔奴 祢能	138	萬葉集類標卷之／ 尔		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		139	萬葉集類標卷之／ 奴		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
		140	萬葉集類標卷之／ 祢		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
		141	萬葉集類標卷之／ ○能		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
73	萬葉集類標 波	142	萬葉類字／波		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
74	萬葉集類標 比	143	萬葉類字／比		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
75	萬葉集類標 不反 保	144	萬葉類字／夫		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
		145	萬葉類字／反		C	1	アイウエオ順			
		146	萬葉類字／保		C	1	アイウエオ順			
76	萬葉集類標 波比	147	萬葉集類標卷之／ 波		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		148	萬葉集類標卷之／ ○比部		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
77	萬葉集類標 不反 保	149	萬葉集類標卷之／ 夫部		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
		150	萬葉集類標卷之／ 反部		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
		151	萬葉集類標卷之／ 保部		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			
78	萬葉集類標 萬	152	萬葉類字／萬		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
79	萬葉集類標 萬	153	萬葉集類標卷之／ 万部		C	1	アイウエオ順 (万 葉仮名別)			図、花、墨
80	萬葉集類標 美武 米毛	154	萬葉類字／美		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
		155	萬葉類字／武		C	1	アイウエオ順			
		156	萬葉類字／米		C	1	アイウエオ順			
		157	萬葉類字／毛		C	1	アイウエオ順			
81	萬葉集類標 也由 与	158	萬葉類字／也		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
		159	萬葉類字／由		C	1	アイウエオ順			
		160	萬葉類字／与		C	1	アイウエオ順			
		161	萬葉類字／良		C	1	アイウエオ順			
82	萬葉集類標 和為 患袁	162	萬葉類字／和		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
		163	萬葉類字／為		C	1	アイウエオ順			
		164	萬葉類字／患		C	1	アイウエオ順			
		165	萬葉類字／袁		C	1	アイウエオ順			
83	萬葉集類標 勝地	166	萬葉勝地類標		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
84	保元平治物語類標 全	167	保元平治物語合本 類字		C	1	イロハ順		⑪	図
		168		栄花物語／三鏡／ 続世継	A	2	アイウエオ順			図、墨
85	栄花物語 水鏡／ 大鏡 増鏡 今鏡 類標	168			A	2	アイウエオ順			図、墨
86	徒然草文段鈔類標 全	169	徒然草類標／文段 抄	徒然草文段鈔類標	A	1	アイウエオ順			図、花、墨
87	袋草紙 無名抄 海人藻芥 類標	170	袋草子類字		C	1	イロハ順			図
		171	長明無名抄		C	1	イロハ順			
		172	海人藻芥		C	1	イロハ順			
88	物語類標／竹取 濱松／住吉 伊勢 ／大和 落窪	173		物語七種	A	2	アイウエオ順			図、花、墨
89	栄花物語類標 上	174	類標卷之十五上／ 栄花物語上		B	2	神祇、地名等			図、墨
90	栄花物語類標 下	175	類標卷之十五下／ 栄花物語下		B	2	言語 (アイウエオ 順)			図、墨

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
91	空穂物語類標	176	空穂物語類標	宇津保物語類標	A	2	アイウオエ順			図、花、墨
92	狭衣物語／取替波也／宇治大納言物語／宇治拾遺 類標	177		狭衣物語／取替波也／宇治大納言／宇治拾遺	A	2	アイウエオ順			図、墨
93	土佐日記／枕冊子類標 全	178	類標卷之十二 土佐日記	類標／土佐日記／枕冊子	B	4	アイウエオ順	⑫	⑬	図、花、墨
		179	類標卷之十二 枕冊子		B	4	アイウエオ順		⑭	
94	源氏物語色葉分上	180		自伊至津／源氏以呂波分 乾	A	1	イロハ順			図、花、墨
95	源氏物語色葉分下	181		源氏目六 坤	A	1	イロハ順			図、花、墨
96	源註餘滴目録 上	182	源註餘滴目録	源註餘滴目録	A	1	イロハ順			図、墨
97	源註餘滴目録 下	183	源註餘滴目録	源註餘滴目録	A	1	イロハ順			図、墨
98	栄花物語 目録年立 上	184	栄花物語上之巻	栄花物語目録年立上之巻	A	年立型	巻名、帝名、目録年立 (巻名順)		⑮	図
99	栄花物語 目録年立 下	185	栄花物語 下之巻	栄花物語目録年立下之巻	A	年立型	巻名、帝名、目録年立 (巻名順)		⑯	図
100	栄花物語事蹟考勘上	186	栄花物語事蹟考勘		C	系図・年立型	作者、物語時代之事、帝王など			図、花、墨
101	栄花物語事蹟考勘下	187			C	年立、系図	年立、関係者系図			図、花、墨
102	河海鈔類字 完	188	河海抄類字	河海鈔	A	1	イロハ順			図、花、墨
103	八雲御鈔類標	189	八雲鈔類字	八雲御鈔	A	1	イロハ順			図、花、墨
104	歴代朝 詔詞解類標 全	190		詔詞解類標	A	1	イロハ順			図、墨
105	百練抄類標 全	191	百練抄字類	百練抄	A	1	イロハ順			図、花、墨
106	延喜式類字 一	192	延喜式類字	延喜式 一／アイウエオ	A	1	アイウエオ順			図、墨
107	延喜式類字 二	193		延喜式 二／カキクケコ	A	1	アイウエオ順			図、墨
108	延喜式類字 三	194		延喜式 三／サシスセソ	A	1	アイウエオ順			図、墨
109	延喜式類字 四	195		延喜式 四／タチツテト	A	1	アイウエオ順			図、墨
110	延喜式類字 五	196		延喜式 五／ナニヌネノ／ハヒフヘホ	A	1	アイウエオ順			図、墨
111	延喜式類字 六	197		延喜式 六／マミムメモ／ヤ○ユ○ヨ／ラルルレロ／ワキ○エラ	A	1	アイウエオ順			図、墨
112	山城名勝志類標附諸陵式 全	198	類標卷之八 山城名勝志		B	4	アイウエオ順	⑰	⑱	図、墨
		199	類標卷之八 諸陵式		B	2	アイウエオ順		⑲	
113	地名類標 完	200		地名類標	A	1	アイウオエ順			図、花、墨
114	釈家人名録 上	201	釈家人名録巻上		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
115	釈家人名録 中	202	釈家人名録巻中		C	1	アイウエオ順			図、花、墨
116	釈家人名録 下	203	釈家人名録巻下		C	1	アイウエオ順		⑳	図、花、墨
117	元亨釈書類字 全	204	元亨釈書類字 蔵書上段丁数		B	1	イロハ順			図、花、墨
118	本朝高僧伝色葉分全	205	本朝高僧伝色葉分		B	3	イロハ順			図、花、墨
119	日本靈異記類字	206	日本靈異記本訓類字	日本靈異記	A	1	イロハ順			図、花、墨
120	古今著聞集類標	207	古今著聞集	古今著聞集	A	1	イロハ順			図、墨

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
121	古今著聞集類標 上	208	古今著聞集類標卷 上	古今著聞集類標卷 上	C	1	アイウエオ順、頭 書に部類			図、花、墨
122	古今著聞集類標 下	209	古今著聞集類標卷 下	古今著聞集類標卷 上	C	1	アイウエオ順、頭 書に部類		㉑	図、花、墨
123	篆隸萬象名義画引 全	210	篆隸萬象名義画引		B	1	画数順			図、墨
124	翻訳名義抄 法華 文句／釈氏要覽 祖庭事苑／拾言記 拾言記追加 類標	211	類標卷廿一		B	2	アイウエオ順			図、花、墨
125	姓名索引 後紀	212	日本後紀残欠印本		C	1	アイウオエ順			読みえぬ篆 書体の陰方 無画の印、 「明治十八 年改」、図
126	姓名索引 続紀／ 阿行	213		国史姓名抄	C	1	アイウエオ順			読みえぬ篆 書体の陰方 無画の印、 「明治十八 年改」、図
127	姓名索引 続紀／ 末行	214			C	1	アイウエオ順			読みえぬ篆 書体の陰方 無画の印、 「明治十八 年改」、図
128	姓名索引 続紀／ 奈行	215			C	1	アイウエオ順			読みえぬ篆 書体の陰方 無画の印、 「明治十八 年改」、図
129	姓名索引 続紀／ 左行	216			C	1	アイウエオ順			読みえぬ篆 書体の陰方 無画の印、 「明治十八 年改」、図
130	姓名索引 続紀／ 加行	217	続日本紀		C	1	アイウエオ順			読みえぬ篆 書体の陰方 無画の印、 「明治十八 年改」、図
131	遊仙窟類標 全	218	遊仙窟類標		B	4	アイウエオ順	㉒		図、花、墨
		219	追加		B	2	故事			
132	書言故事類標 全	220			C	2	イロハ順		㉓	図、花、墨
133	秬林枝葉 上	221	事物類字卷之一		C	1	イロハ順			図、花、墨
134	秬林枝葉 下	222	事物類字卷之四		C	1	イロハ順		㉔	図、花、墨
135	写生叢林類標 完	223			C	2	イロハ順			図、堀氏文 庫
136	続花押藪類標 完	224			C	5	イロハ順		㉕	図、花、堀 氏文庫、読 み得ぬ方陽 印
137	諸家花押類字 上	225			C	4	イロハ順			図
138	諸家花押類字 中	226			C	4	イロハ順			図
139	諸家花押類字 下	227			C	4	イロハ順			図
140	朝野羣載類標	228	朝野群載類字	朝野羣載類標	A	1	イロハ順			図、墨
141	江談抄／古事談／ 続古事談 類字	229	江談抄類字	江談／古事談／続 古事談	A	2	イロハ順			図、花、墨
		230	古事談類字		A	3	イロハ順			図、花、墨
		231	続古事談類字		A	4	イロハ順			図、花、墨

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
142	本草和名類標 全	232	類標卷之七 本草 和名		B	1	アイウエオ順	㊸		図、花、墨
143	随筆目録 伊行	233			C	1	イロハ順	㊹	㊸	図
144	随筆目録 知行	234			C	1	イロハ順		㊹	図
145	随筆目録 与行	235			C	1	イロハ順		㊺	図
146	随筆目録 良行	236			C	1	イロハ順		㊻	図
147	随筆目録 也行- 天	237			C	1	イロハ順		㊼	図
148	随筆目録 恵行- 寸	238			C	1	イロハ順		㊽	図
149	随筆目録 阿行- 志	239			C	1	イロハ順		㊾	図
150	類聚三代格 新修 往生伝／拾遺往生 伝 三外往生伝／ 続拾遺往生伝 類 標 完	240	類聚三代格	類聚三代格／拾遺 往生伝／後拾遺往 生伝／新修理往生 伝／三外往生伝	C	1	丁数順			図、墨
		241	拾遺往生伝印本		C	1	丁数順			
		242	後拾遺往生伝		C	1	丁数順			
		243	本朝新修往生伝		C	1	丁数順			
		244	三外往生記		C	1	人名伝別			
151	壺囊抄目録 全	245		壺囊抄目録	C	1	イロハ順			図、墨
152	類從神祇部色葉分 上	246	羣神祇部	神祇書類標 上	A	1	イロハ順			図、花、墨
153	類從神祇部色葉分 下	247		神祇書類標 下	A	1	イロハ順			図、花、墨
154	類從武家部色葉分	248		武家部／羣書類從 以呂波分	A	2	イロハ順			図、花、墨
155	類從武家部色葉分	249		武家部／羣書類從 以呂波分	A	2	イロハ順			図、花、墨
156	類從武家部色葉分	250		武家部／羣書類從 以呂波分	A	2	イロハ順			図、花、墨
157	類從武家部色葉分	251		武家部／羣書類從 以呂波分	A	2	イロハ順			図、花、墨
158	群書類從連歌部色 葉分 全	252		連歌部／群書類從 色葉分	A	2	イロハ順			図、花、墨
159	群書類從日記部色 葉分 上	253		自伊／至久／群書 類從／日記部以路 分 上	A	2	イロハ順			図、花、墨
160	群書類從日記部色 葉分 下	254		自屋 内屋々部脱 ／至須／群書類從 ／日記部以路波分 下	A	2	イロハ順			図、花、墨
161	群書類從物語部色 葉分	255	和歌部類字	物語十一種 下	A	2	イロハ順			図、花、墨
162	類從消息部色葉分	256	消息部類字	消息類標	A	1	イロハ順			図、花、墨
163	群書類從律令部色 葉分 全	257	群書類從律令部色 葉分		C	2	イロハ順			図、花、墨
164	群書類從公事部色 葉分 全	258		公事部／羣書類從 第七十九	A	2	イロハ順			図、花、墨
165	類從官職部類標 全	259		官職書 八種	A	1	イロハ順			図、花、墨
166	類從飲食部色葉分 上	260		自伊至久／飲食部 色葉分 天	A	2	イロハ順			図、花、墨
167	類從飲食部色葉分 下	261		自也至須／飲食部 色葉分 地	A	2	イロハ順			図、花、墨
168	類從装束部色葉分	262	麻左須計装束抄類 字	装束書類標	A	1	イロハ順			図、花、墨
169	類從合戦部色葉分 全	263		合戦部／長祿寛正 記／文正記／羣書 類從以呂波分	A	2	イロハ順			図、花、墨

冊別 NO.	外題	子書誌 NO.	内題	扉題	型	段	配列	序跋	奥書・ 識語	蔵書印
170	類従蹴鞠部色葉分 全	264		蹴鞠部／以呂分	A	2	イロハ順			図、花、墨
171	類従 古語拾遺 大鏡裏書／康平記 玉造小町／新猿樂 記 類標 上	265		古語拾遺／大鏡裏 書／康平記／玉造 小町／新猿樂記	A	1	イロハ順			図、墨
		266	文筆部類字		A	2	イロハ順			図、墨
172	類従 古語拾遺 大鏡裏書／康平記 玉造小町／新猿樂 記 類標 下	267		類従 古語拾遺 大鏡裏書／康平記 玉造小町／新猿樂 記 類標	A	1	イロハ順			図、墨
		268	文筆部類字		A	2	イロハ順			図、墨
173	類従文筆部類標 上	269	懐風藻	文筆書抄出 上	A	1	丁数順			図、花、墨
		270	凌雲集		A	1	丁数順			図、花、墨
		271	文華秀麗集		A	1	丁数順			図、花、墨
		272	経国集		A	1	丁数順			図、花、墨
		273	扶桑集		A	1	丁数順			図、花、墨
		274	本朝麗藻		A	1	丁数順			図、花、墨
		275	本朝無題詩		A	1	丁数順			図、花、墨
		276	都氏文集		A	1	丁数順			図、花、墨
		277	菅家後集		A	1	丁数順			図、花、墨
		278	江吏部集		A	1	丁数順			図、花、墨
		279	法性寺閔白御集		A	1	丁数順			図、花、墨
		280	雑言奉和		A	1	丁数順			図、花、墨
281	泥之草再新	A	1	丁数順			図、花、墨			
174	類従文筆部類標 下	282	懐風藻	文筆書抄出 下	A	1	丁数順			図、花、墨
		283	凌雲集		A	1	丁数順			図、花、墨
		284	文華秀麗集		A	1	丁数順			図、花、墨
		285	扶桑集		A	1	丁数順			図、花、墨
		286	経国集		A	1	丁数順			図、花、墨
		287	本朝麗藻		A	1	丁数順			図、花、墨
		288	田氏家集		A	1	丁数順			図、花、墨
		289	江吏部集		A	1	丁数順			図、花、墨
		290	本朝無題詩		A	1	丁数順			図、花、墨
		291	秋夜長物語		A	1	丁数順			図、花、墨
		292	御隨身三上記		A	1	丁数順			図、花、墨
		293	豆相記		A	1	丁数順			図、花、墨
		294	景虎参調丁鶴岡八 幡宮		A	1	丁数順			図、花、墨
		295	河越記		A	1	丁数順			図、花、墨
		296	深谷記		A	1	丁数順			図、花、墨
		297	宴曲集		A	1	部立別			図、花、墨
		298	代始和抄		A	1	丁数順			図、花、墨
		299	代始和抄奥書		A	1	丁数順			図、花、墨
	群書類従和歌部色 葉分 千首／百首	300	和歌部類字	千首百首 七種	A	1	イロハ順			図、墨
175	群書類従和歌家集 部色葉分 上	301		群書類従和歌集色 葉分	A	2	イロハ順			図、花、墨
176	群書類従和歌家集 部色葉分 下	302		家集 廿二種	A	2	アイウエオ順			図、花、墨
177	類従紀行部色葉分 上	303		類従紀行部目六 乾	A	2	イロハ順			図、花、墨
178	類従紀行部色葉分 下	304		類従紀行部目六 坤	A	1	イロハ順			図、花、墨

【凡例】 空欄はないことを示す。型のABCは、A＝扉題付無罫。B＝有罫紙。C＝扉題無罫紙を示す。段数は上下段を2とした。Bの3,4段には横線を引いたものもあるがその区別は無視してある。蔵書印は図＝図書寮蔵、花＝花廬家文庫、墨＝墨阪十一代主写蔵記の略である。「／」は改行ないし行替を示し、「、」は並列を示す。いずれも細字、肩書などの区別なく記した。本来は179冊のはずだが稿者の調査では178冊を数えるのみで、欠落本があるわけではないと思われる。ご教示を願いたい。

A Study of the *Ruihyo* Compendium in the Imperial Household archives:
The appearance of indexes in the late early modern period and its intellectual background

Kei UMEDA

I conducted a thorough investigation of the text titled *Ruihyo*, an index compendium housed in the Imperial Household Archives. *Ruihyo* is a genre of text that made it possible to search the content of a given work by page number. It is also a text that shows us something about contemporary practices of textual research.

This particular *ruihyo* is composed mostly of (1) a smaller *ruihyo* collection planned by the late Edo nativist scholar (*kokugakusha*) Kurokawa Harumura 黒川春村, and (2) books belonging to his sponsor, Hori Naotada 堀直格. I discovered that this *ruihyo* in its current shape is made up of texts that circulated among a number of nativist scholars associated with these two.